

万葉の海

小林 吉 一

はじめに

私は、万葉の海について関心を寄せている。しかし、いま私に、とりたてて述べるべきものがあるわけではない。とにかく海を話題にして、大方のお教えをいただきたいと思えばかりである。

いったい、万葉集において、和歌文学として、海はどのようにして叙事・叙景・抒情されたか、もしくははされなかったか。いうまでもなく作品には、海をうたうものと、海でうたうものがあり、いかえれば表現の対象・内容とする海と、表現の手段とする海があるはずだが、万葉各期にわたりどうであったか、というようなことについてである。さらには、それが古今集など次代の作品にどう受けつがれていったか、というようなことだ。むろん、これらは私に

とってスローガンにすぎないものである。はたして、これが論究可能なかどうか、そして有効なのかどうか、不明の状態だからである。

それに、実はもともと私のおもな関心は、むしろいわゆる万葉びとじしんを規制した海について、にある。表題を、「万葉集の」ではなく「万葉の」としたゆえんでもあるのだけれど、するとこれは、右のスローガンを裏切り、あるいは万葉学が克服してきた問題に後戻りするようなものらしい。少なくとも、今回予想されるシンポジウムの方向と逆行するような気がする。

お許しただければ、あいかわらずのテキストだが、「海神は靈しきものか……」・「島伝ひ……」(巻三―三八八・三八九)を主軸に、「熱田津に……」(巻一―一八)や「わたつみの豊旗雲に……」(巻一―一五)や「玉藻よし讃岐の国は……」(巻二

—二二〇—などをからませて、話題提供したいと考える。むろん、きわめて啓蒙的なものにすぎない。

よくいわれて久しい、海国日本とか、海洋民族日本人とか、島国文化の日本なのに、意外に海の文学や海洋作品が未発達とされる。本当にそうなのか。もしそうなら、それはなぜか、ぜひ知りたいものだ。中にあつて、万葉集における海の作品は、日本文学史を貫いてその物量が圧倒的に豊富であつた。

一

海の文学といったものについては、いろいろな言説があり、万葉集についてのそれにも、さまざまな言及があるが、いまそれらの中からかりに津田左右吉・武田祐吉・柳田国男の三先覚、いつてみれば〈三田氏〉の論述を代表として、多少長いけれども掲げておこう。

まず、津田氏に、次のような記述がある。

海においてもその情趣は山に於けるのと同様である。

「けひの海にはよくあらしかりこもの乱れ出づ見ゆ
海人の釣船」(卷三人麿)、「伊勢の海の沖つ白なみ花に
もがつ、みて妹が家苞にせむ」(卷三安貴王)、「白波の
よせ来る玉藻よのあひだも継ぎて見に来む清き浜び
を」(卷一七池主)、白砂青松、波静に水清き瀬戸内海

はいふまでもなく、太平洋の烟波に対しても日本海の怒涛に対しても、彼等はたゞ美しき小波のよするを愛するに過ぎなかつた。特に奇異なのは、万葉一五の巻に見える遣新羅使の舟中の作である。海上を航行しながら海の歌は甚だ少い。あつても「月よみの光を清み夕なぎに水手の声よび浦みこぐかも」のやうに狭い海である。それでなければ、「草枕旅を苦しみ恋ひをればかやの山べに小男鹿なくも」(壬生宇太麿)、「百船のはつる対馬のあさち山時雨の雨にもみだひにけり」のやうに、海をゆきながら陸上の景色を詠じてゐる。或は「玉しける清き渚を潮みてば飽かずわれゆく帰るさに見む」(阿倍継麿)などといふ。渚でなければ岸辺のみみぢ、当時の人が繊細な優美な光景のみを賞でたことはこれでも知られる。「おほ海に島もあらなくに海原のたゆたふ波に立てる白雲」などは、や、壮大な眺であるが、かういふ例は極めて少い。「大海の海底どよみ立つ浪のよせむと思へる磯のさやけさ」の上三句が目前の光景を叙したものでないことも思ひ出される。「大海の波は畏し然れども神を齋ひて船出せばいかに」(以上卷七)、海は畏るべきものと考へられてゐたのを見れば、崇高な洋上の光景が彼等の目に映じなかつたのは無理もない。彼等のやさしい神経は、ひたすらにその

前に萎縮してしまつたのである。

(中略)

既に述べたことがある如く、歌人が農民や漁夫舟人の地位に身を置いて作つたものはあるが、それとも農耕の気分や漁撈航海の情趣を歌つたと見なすべきものは、殆ど無い。特に瀬戸内海の往復によつて航海の経験をもつてゐる歌人の作に於いて、舟が多く陸上からの眺めとして詠ぜられ、海路ゆく舟人の情懷の歌はれてゐるものの極めて稀であり、海国でありながら海洋文学の發達しなかつたことが、注意せらるべきである。これも歌が貴族文学であつたからである。民謡としては漁夫や舟人の生活を歌つたものがあつたに違ひないが、それは万葉に採られてゐない。

『文学に現はれたる國民思想の研究』第一卷)

次に、武田氏には、以下のような記述がみえる。

わが国は海国であつて、四面に海を環らしてゐることはいふまでもないことである。したがつて古くからこの海洋に関する歌も多いのであるが、これが中世以後は鎖國的になつてしまつて、海に関する歌などは、きはめて少なくなつてしまふ。『万葉集』には上述したやうな遣外使節を始め、また国内の旅行にしても海を航することは割合に多い。かくしてここには海洋に関

する歌がたくさんある。海洋に接して國民の氣象がおのづから宏大になるといふことは、これはまた事実であつて、この海国に生を受けてゐる者に対して、進取的な氣象を育成するにあづかつて力がある。同時にこの時代の人々が、みづから進んで艱難に接するといふ氣概をもつてゐたことが知られるのである。陸路を行くよりは、當時としてはやはり海路を行くはうに困難は多いけれども、さういふことを恐れずに、海洋をしごぎ渡つて、國民としての自分を尽くす、かういふ意識に燃えてゐるのである。自然海を歌ふ歌は、『万葉集』にたくさんあるが、それらの歌は、非常に氣象の雄大なものに富んでゐる次第であるが、今これらの歌について少し述べておかうと思ふ。

(中略)

かやうにそれぞれ特色ある歌が多く残つてゐる。これは古人が海を航しあるいは海岸に旅行をして、その時その時の思ひをこれらの歌に残してゐるのである。そこには日本の人々の氣象として、非常に大きな海をも歌ふし荒海をも歌ふ。またもちろん静かな海をも歌ふ。かやうに海洋によつてわが民族性の養はれてきたことは、また自然の感化の一になるのである。非常に変化の多い海、ある場合にはその荒波を押し切つても

航海する。ある場合には岸边に静かに打ち寄せる波を樂しむ。そこに飛び翔る鶴を愛する。さういふ自然から受ける感化の非常に大きいものがある。この集の人々は海洋に接近し、それから種々の美をも感じ、また自分の勇氣をも奮ひ起こしてきてゐるのである。

(中略)

以上は、この集の人々が海洋に親しんで住んでゐたことを説いたのであるが、その海洋の壮大性から民族性の涵養せられるところであつたものといつてよろしい。あるいは荒海を押ししのいで行く人々の元氣は、海洋に親しむことによつて強く養はれる。鎖国的になつてしまへば、海をひたすらに恐れるばかりである。それに対して海に親しむことが、わが民族発展の第一歩であるといへるのである。さういふ意味で、海に關する歌を述べてきた。後世平安時代以後の歌には、多く見るを得ざるところであるといふ意味においても、『万葉集』の特色となすことができるのである。

(『万葉自然』——『国文学研究』万葉集篇二 柿本人麻呂攷』所収)

つづいて、柳田氏では、このような記述になつてゐる。

是は直接に風景の問題で無いが、所謂有識階級には昔から引續いて、海部の感覺を承け繼いで居る者が、

農夫のそれよりも遙かに少なかつた。或は全く無いと言つてもよかつた。彼等の間には内陸に入つて来て、邑里の人々に混じようとする者も無かつたらしい。何れ一度は大海を渡つて、到着した者の末であるだらうが、日本人の多くは海の生活を異郷視して居た。其原因は或は信仰であつたかも知れない。海の辺には漁民で無い者も多く村を造つて居るが、彼等はどういふわけか一般に海の生活技術を学ぶことが遅かつた。殆ど渚の線まで耕作をして居る者は、海を畏れ憚る情のみ強くて、親しみは持つて居ないやうに見えた。山を隔て、住んで居る人たちは、勿論出て来れば非常に珍しがるが、同時に又をかしい程海をこはがつて居る。川でも湖でも、船に酔ふ人は甚だ多く、舟を操る者は至つて少ない。日本に海洋文学の発達しなかつたことを、訝り怪む外国人は多い。丸で生れなかつたわけでも無いが、全体に海をよそ／＼しく氣味の悪いもの、様に取扱つたものが多くて、其壯麗を讚歎したやうな作品は、搜しても見つからぬのである。海人の子・あまをとめは歌にも屢々詠まれて居るけれども、それは多々たゞ憐まれて居る。

世の中はかくても経けり象潟や蜚あまの苫屋を我宿にして

斯ういふ種類の三十一字のみが、幾らとも無く感吟せられたのである。須磨や明石の物語にも有るやうに海辺に住むといふことは流謫であり仮寓であつた。いつも憂愁の情を以て之を眺めて居たのである。海の風景の写し方と愛し方の、たゞ一隅に偏したのも当然の結果であつた。

〔明治大正史 世相篇〕

いうまでもなく、三者それぞれに、その論説の目的や意図が同一ではないのだが、津田博士の場合、どちらかといふと無いものを中心から結果が多く否定的になり、武田博士の場合は、有るものを論ずるから肯定的になつてゐるように思う。万葉における海の作品の存否やその評価について、二者は対照的にみえる。一方、柳田先生の場合では、対象を万葉にかぎつていないから比べようがないのだけれど、概して津田教授の側に寄つてゐるといえよう。そのライフワークの一つとしての名著『海上の道』を残した柳田翁の言論としては多少意外な感をもつが、とくに海への疎遠感とか海の生活の異郷視とかの原因を、信仰に求めようとする視点に注目しておきたい。

二

ところで、ここに一編の論文がある。高木市之助博士の「三つの海」〔古文芸の論〕である。本稿は、このまこと

に示唆に富む論考に依拠して出発するので、しばらくその主要な言説をたどつておこう。

まず考へなければならぬことは、この場合海とは何であるかといふことである。海はもちろん文字どほりに海であるが、ただそれが文学との関連において考へられるとすれば、海は必然に一つの文芸意識でなければならぬ。つまり日本文学の中に海がいかに意識されてゐるかといふ一般的な意味よりも、むしろ日本文学を創造していく文芸意識あるいは美意識の中に海がおよそどのやうな役割をもつかといふ、もつと特殊な意味が考へられなくてはなるまい。

かういふふうに考へていくと、たとへばわれわれの郷土はいはゆる大和島根であるから海を題材とした文学が豊富であるとか、または逆にそれにもかかはらず貧困であるとかいふ命題は一応は採りあげなくてはならないとしても、ただそれだけでわれわれはこの課題に満足すべきでないことがはつきりとしてくるやうである。

(中略)

それでは、海の中のやうな意識が日本の古文芸の創造と伸張に参与したか。卑見にしたがへば、およそ海が文芸意識としてもつ性格はもちろん多様多岐である

が、中で特に注意すべきものは三。一は深遠なるものへの沈潜、二は無限なるものへの憧憬、三は清純なるものへの浄化である。

右は、論文の冒頭部分であったが、中略個所で高木氏は例として芭蕉の奥の細道にふれて、その中にも「われわれは芭蕉の創造的な文芸意識に参与してゐる少なくとも三様の最も顕著な海を求めることができる」として、松島の「笑ふ海」、象潟の「怨む海」、佐渡の「怒る海」とでもいうべきものを指摘し、次のようにもいつている。

とにかくかうした一人の作家によつて書き続けられた一編の紀行文の中にすら、海は少なくとも三様の役割をもつてゐるのである。してみれば単にある文学が海を題材にしてゐるとか、比喩象徴として海を愛用してゐるとかいふことは、それだけではあまりそらざらしい、文学技巧の問題である。問題はまづ海がその文学において笑つてゐるか怨んでゐるかに始まり、さらにさうした笑ふ海や怨む海が当該文学の性格をいかに規定してゐるかといふ方向に進められるべきであらう。これらを受けて、引用の後半部におよぶのである。高木博士は、そこで、文芸意識として海のもつ性格の、注意すべきものを三つ示しているわけで、あらためて列挙すると、

一、深遠なるものへの沈潜

二、無限なるものへの憧憬

三、清純なるものへの浄化

である。そして、古文芸（主として万葉集）の中にそれだけの例をさぐつてゐる。しかし、すべて三に集中しており、一、二に關しては、ほとんど例を見出せないという。結局のところ、

以上述べきたつたところを一応要約するならば海は万葉集あるいは広く上代日本文学において、深遠なるものへの沈潜とか、無限なるものへの憧憬とかいふ性格においては最初に考へてみたやうにほとんど否定的であつたにもかかわらず、ここに採りあげてみたもう一つの性格、清純なるものへの浄化といふことについては著しく肯定的であつて、そこに、さうした意識の日本文学の創造過程への相当に重要な意義を認めざるをえないといふことに帰着するやうである。

というのであつた。

博士は、一に關連する例として、すべて条件つきながら、次の三首にふれてゐる。

海神は 靈しきものか：

（卷三—三八八）

荒津の海 潮干潮満ち時はあれど いづれの時かわが

恋ひざらむ （卷十七—三八九—）

苦しくも降り来る雨か 神の崎狭野の渡りに家もあら

なくに

(卷三—二六五)

「海神は」の歌については、「万葉人の意識には、はたして深遠なるものへの沈潜が経験されたかどうかは疑問であるが、ただ何かしらさうしたものを感じようとする方向だけは認められるやうである」とし、「荒津の海」については、「思索といふほどの内容はなくとも、どこか海のもつ大きな真理に、自分の思想を合せていかうとする方向だけは認められるやうである」といい、「苦しくも」には、これを例外としつつも、「相当に陰影をもつた海岸の姿らしいものが表現されてゐる」とある。だが、総じて、古典文学における日本の海には冥想や思索を導くだけの暗さが欠けている、というのであった。

二に関連するものについても、概括的に「日本古典文学に関する限りにおいてはあまりはつきりと感ずることはできないやうである」とあり、例外的に阿倍仲麻呂の「青海原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」(土佐日記・古今集)を挙げ、「いくぶん外洋を越えて郷愁を感じさせる」としたうえで、

沖つ藻を隠さふ波の五百重波 千重しくしくに恋ひ渡るかも
(卷十一—二四三七)

を示し、この歌のように、「象徴寄物の世界において海のかうした性格に近い何ものかにあこがれてゐるらしい作品も

絶無ではない」としているのであった。そして、私などは不服なのだが、たとえば神話や伝説歌などと、この二の性格との関連も否定的なのであった。実は、それらと、先の一の性格との関連も、求めるのがむづかしいとするのだった。

そうして、最後の三に関連する例ということになるが、これが文学史を貫いて圧倒的なもので、前に引用したような三の性格・意識の「日本文学の創造過程への相当に重要な意義」などについて、細かく言及して、示唆にあふれているのである。しかし、この方面のことは、このたびの私の目標とは少々距離があるので、内容については省くことにする。

本稿の意図は、必ずしも万葉集の作品形象とか文学意識に密着していないが、高木博士の上記の三つ海に即した場合にも、その乏しいといわれる一、二の要素もかなり認めうるのではないか、ということにある。

三

諸家の多くは、次の一首を、万葉特有の、海の大きさを歌つたものとして、推賞する。作者不明で、伊勢従駕のものとあるから、伊勢湾あたりの情景かとされる。

大海に島もあらなくに 海原のたゆたふ波に立てる白

さて、次の歌は、私のとても好きな歌であり、やはり諸氏の評価も高いようである。

羈旅の歌一首 短歌を并せたり

海神は 靈しきものか 淡路島 中に立て置きて 白
波を 伊予にめぐらし 居待月 明石の門ゆは 夕さ
れば 潮を満たしめ 明けされば 潮を干しむる 潮
騒の 波をかしこみ 淡路島 磯隠りて 何時しか
も この夜の明けむと さもらふに 眠の寝かてねば
滝の上の 浅野の雉 明けぬとし 立ち騒くらし い
ざ子ども あへて漕ぎ出む にはも静けし

(卷三一三八八)

反歌

島伝ひ敏馬の崎を漕ぎ廻れば 大和恋しく 鶴さはに
鳴く

(卷三一三八九)

右の歌は、若宮年魚麻呂誦ふ。但し、いまだ作者を審らかにせず。

同じく、作者不明歌で、それをたぶん歌自慢の若宮年魚麻呂という者が吟誦してみせたという、いわば誦い物風のものだったのであろう。それにしても、長歌はよく整った、緊張感のある作品といえよう。船の旅をしている作者が、淡路島で潮待ち・風待ち・波待ちをして一泊したのである

(反歌によると帰路らしい)。風を折り願い、ひたすら息をつめるようにして夜をすごす。海波の平安を恵む海神への帰依は絶大であったから、「海神は 靈しきものか」の賛嘆が発せられる。海潮の干満や風浪の処置など一切が、海神の仕業であることを敬虔に信じている。それに、瀬戸内海東部の地勢を大局的にうたい、まさに神話的に構成されており雄大なだが、淡路島を中心に伊予(四国)・明石などの国土の修理工成までが、この海神の靈妙な威力によるかのごとくである。前言のとおり、高木博士は、この一首に、先の一の性格の海を一部認めようとしたのであった。

海および海の神の「かしこさ」、すなわちその神秘性やそれに対する畏怖感から、内面におののくような緊張感をもつて詠出しているようにみえる(反歌はとてもおとなしい)。すると、私はどうしても、柿本人麻呂の著名な二首を思い出してしまふ。「筑紫国に下りし時、海路にて作る」もの。

名くはしき印南の海の沖つ波 千重に隠りぬ 大和島

(卷三一三〇三)

根は 大玉の遠の朝廷と あり通ふ島門を見れば 神代し思

(卷三一三〇四)

ほゆ 神話的発想と海の偉大性を内容としていて、非常に類似性を感じる。そして、そこに高木博士の「一の海、ときとして

二の海の存在を思うのである。さらには、中大兄皇子と額田王の、それぞれ有名な作品を連想せざるを得ない。

わたつみの豊旗雲に、入日さし 今夜の月夜さやけかり

こそ (巻一一五)

熟田津に船乗せむと月待てば 潮もかなひぬ 今は漕

ぎ出でな (巻一一八)

両首とも重要であるせいで議論の絶えぬものだが、前歌と合せていずれにも海神と月と潮のいわば三点セットの共有が想察されるところだ。旅——、とりわけ海路の恐怖・不安を鎮め和めるとともに、前途(明日)の平穩無事を祈り願う、夕べ(夜)の呪術・儀礼・祭式・習俗などにもとづいて発想・表現されたものであろう。指摘されているように、これらの歌のほとんどに地名が詠みこまれているのも、単なる旅情の表出ではなく、地霊の加護を祈つてのいわば鎮魂性に根ざしているのだ。

このような視点は、早くからいわゆる折口学の主張してやまないところだったことはいうまでもない。西郷信綱氏などが強調しつづけて来たことでもあるけれど、「わたつみ」や「豊旗雲」や「入日さし」までや、ときには「印南」や「熟田津」や、さらには「船乗」(へ夜の船出)・「神女の船出」(など)もが、まず「霊的な神話的なものを喚起する語」であり、背景の重く大きなハレの言語でもあり、しか

るのち確固たる詩の表現であったことを忘れるべきではない。したがって、引用の諸歌が、単なる自然詠・写生歌というものではなかった次第を、あらためて確認すべきなのであった。

また、この「わたつみの豊旗雲に」と「熟田津に」の両歌について、海外出兵時の歴史背景などをこめて解釈する論考も多く、たとえば「戦勝祈願歌」とか「夜の出陣歌」説が唱えられているけれども、私は採らない。場合によっては、左注などから大いに解放された方がよいと思っている。一般論としても、古橋信孝氏のいうとおり、「歴史的事実と言語表現とをあまりにも直接的に結びつけてはならない」と思う。

ところで、「熟田津に」の一首をよむと、何か魂の充足感のようなものを覚える。月と感応して、あたかも霊威の水(血潮)が体内を潤々と満たすかのよう。これが歌のもつ呪性の一部なのだろうか。折口学の導く信仰事象、へ水の鎮魂、儀の存在に、それはもとづくにちがいない。人麻呂の「伊勢国に幸しし時、京に留れる」時の歌三首中の、とくに「なにかしら官能的な内容も惹起される一首、
嗚呼見の浦に船乗すらむ をとめらが玉藻の裾に潮満
つらむか (巻一一四)

も同様である。この三首歌については、最近も保坂達雄氏

の論述があるところ⁽⁵⁾。だから、あえてつけ加えておけば、山部赤人作の長歌の反歌だが、

もしもしきの大宮人の 熟田津に船乗しけむ 年の知らなく
(巻三―三二三)

が、必ずしも額田王歌(八番歌)の往時だけを想定してゐなくてよい。そればかりか、額田王作以前にも類同の先行作歌があつたとみたいほどのだ。かりに舒明帝の時、宝皇后(のちの皇極・斉明帝)が「神女」の資格をつとめたことが熟田津であつたとして、その作などが――。そしてこのたびは、女帝になつた皇后にかわつて「神女」たる額田王が作つたのだというふうな――。

ところで、人麻呂の羈旅歌八首は名高い。すぐれた歌がめだつ。そのすべてに地名が詠みこまれてゐるのも注目されてゐる。それは、前述したように地霊とりわけ境界の靈威に対する信仰に根ざすが、今まで問題にしてきた歌々の地名と共通のものが多し。そうして、八首全体を有機的に眺めてみた場合(そんなことが可能なら?)、最初(一首目)と最後(八首目)が何がなし課題の「海神は 靈しきものか」の歌境に類似してゐる。一首目は、下二句が未定訓のもので問題が多いのだが、

三津の崎 波を恐み 隠り江の舟公宣 奴島尔

(巻三―二四九)

餉飯の海の庭好くあらし 刈薦の乱れ出づ見ゆ 海人
の釣船
(巻三―二五六)

である。

なおまた、「海神は 靈しきものか」の作に關し、挽歌ではあるが人麻呂の「石中死人」歌である、「玉藻よし 讃岐の国は……」(巻二―二二〇)の長歌に親近性を認めうるし、後の多少整いすぎるくらいはあるものの、「物に属きて思を発す歌」である、「朝されば 妹が手にまく……」(巻十五―三六二七)の長歌にも、近似性を知りうるだろうと思ふ。

四

高市黒人の海(湖)も注目しなければならぬ。人麻呂とともに、彼も旅の歌人であつた。そしてまた、その歌境の特徴から、「夜の歌人」・「鎮魂の歌人」・「冥想の詩人」等ともいわれる。

いづくにか船泊てすらむ 安札の崎漕ぎたみ行きし 棚無し小舟
(巻一―一五八)

そうして、羈旅歌八首をとどめてもいる。その中の三首。旅にしても恋しきに 山下の赤のそほ船沖へ漕ぐ見

ゆ 四極山うち越え見れば 笠縫の島漕ぎかくる 棚無し
(巻三―二七〇)

小舟せうぶね (卷三二―二七二)

わが舟は比良の港に漕ぎ泊てむ 沖へな離り さ夜ふ
けにけり (卷三二―二七四)

「旅にして」の歌には、赤人の「島隠りわが漕ぎ来れば羨
しかも 大和へ上る真熊野の船」(卷六一―九四四)があり、

「わが船は」の歌には、二句目が「明石の湖に」という形
の「古歌集」の一首(卷七一―二二九)があり、東歌の「夏
麻引く海上濁の沖つ洲に 船はとどめむ さ夜ふけにけ
り」(卷十四―一三三四八)も存する。総じて、黒人歌は寂寥
感に満ちている。高木博士の、深遠なるものへの沈潜たる
一の海に關連する例にはほかならないと思う。

ほかに、たとえば次のような数首はどうであろうか。

鳥じもの海に浮きゐて 沖つ波さわくを聞けば あま
た悲しも (卷七一―一八四)

家にてもたゆたふ命 波の上うへに思ひしをれば 奥処知
らずも (卷十七―三八九六)

大海の奥処おくところも知らず行くわれを 何時来まさむと問ひ
し子らはも (卷十七―三八九七)

から、
世間よのなかを何に譬へむ 朝びらき漕ぎ去にし船の跡なきが
ごと (卷三二―三五二)

また、「世間の無常を厭ふ歌一首」の一つたる、

生死いしじの二つの海を厭はしみ 潮干しほひの山を偲しのひつるかも
(卷十六―三八四九)

鯨魚いさな取り海や死にする山や死にする 死ぬれこそ海は
潮干しほひて山は枯かれする (卷十六―三八五二)

ところで、日本の神話には海洋神話が多い。万葉集の伝
説歌では、次の一首が注意される。

水江みづのゑの浦島うらしまの子を詠む一首

春の日の 霞める時に 墨吉すみよしのぶの 岸に出でゐて 釣船
の とをらふ見れば いにしへの ことぞ思ほゆる
水江みづのゑの 浦島うらしまの子が 堅魚かたしほ釣り 鯛たひ釣り誇り 七日ま
で 家にも来ずて 海界うみさかを 過ぎて漕ぎ行くに 海神うみかみ
の 神のをとめに たまさかに い漕ぎ向ひ 相詔あひこた
ひ こと成りしかば かき結び 常世とこよに至り 海神うみかみの
神の宮の 内のへの 妙なる殿に 携たづなはり 二人入り
居て 老いもせず 死にもせずして 永き世に あり
けるものを…(下略)

ここにみえる「海界」の思想に着目しておきたい。海神の
妙なる殿のある、遙かかなたの常世への境界たる海の果て
である。この種のものに、高木博士のいわゆる、無限なる
ものへの憧憬を示す二の海を認知してよいのではなからう
か。高木氏は諸民族の竜宮伝説と比べて、わが国のそれは
きわめて狭く小さくて、二の海の経験も希薄だといふので

あるが――。

最後に、祝詞の「六月の晦の大祓」を挙げよう。

(上略) かく聞しめしては皇御孫の命の朝廷を始めて、天の下四方の国には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧・夕べの御霧を朝風・夕風の吹き掃ふ事の如く、大津辺に居る大船を、舳解き放ち・艫解き放ちて、大海の原に押し放つ事の如く、彼方の繁木がもとを、焼鎌の敏鎌もちて、うち掃ふ事の如く、遺る罪はあらじと祓へたまひ清めたまふ事を、高山・短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織つひめといふ神、大海の原に持ち出でなむ。かく持ち出で往なば、荒塩の塩の八百道の、八塩道の、塩の八百会に坐す速開つひめといふ神、持ちかか吞みてむ。かくかか吞みては、気吹戸に坐す気吹戸主といふ神、根の国・底の国に気吹き放ちてむ。かく気吹き放ちては、根の国・底の国に坐す速さすらひめといふ神、持ちさすらひ失ひてむ。かく失ひては、天皇が朝廷に仕へまつる官官の人等を始めて、天の下四方には、今日より始めて罪といふ罪はあらじと、……(下略)

実は、高木博士がこれを、先に示した三の海、すなわち清純なるものへの浄化という性格の例としているものなの

だが、私はあえて一の海の例としてみておきたいと考えるのである。高木氏は次のように説く。

大祓の祝詞でもろもろの罪が清められてゆく順序を述べて「荒潮の潮の八百路の八潮路の潮の八百会に座す速開都比咩といふ神持ちかがのみてむ」とある一節において、海がおよそどのやうな意味をもつてゐるかといふことを考へてみるに、この一節は要するに汚穢な諸罪悪が祓ひ除かれてゆく過程的な一つの段階として存在するのであるが、もろもろの罪がこの段階において潮流の渦中に立つ速開都比咩によつて吞まれるといふことの意味は何であらうか。それは罪を無くすることではない。なぜならこれらの罪はつぎの段階において根之国底之国に吹きやられ、そこにゐる速佐須良比咩によつて初めてその存在を失ふことになつてゐるからである。したがつてこの段階において速開都比咩の受け持つ役割はこれら醜悪なる罪を清めることではなくてはならぬ。「はやあきつひめ」のあきは諸注によれば明の義で、穢れを清めて明く清くする義といふのであるから、この段階の受け持つ仕事は神名によつても判断されるわけである。してみればこの神がことさらに潮の八百会に立つて罪を持ちかがのむといふことは、かうした海洋のまつただ中がこの神の受け持つ仕事に

適応してゐるからにはかならず、すなはち祝詞の世界においてかうした潮流の集まる海は汚穢を清浄なるものへと浄化する場所的関連でなくてはならない。ここに古代人の一つの海が窺はれるのである。

もつとも祝詞の場合かうした海を一つの文芸意識と解しうるかどうかは問題であつて、管見によれば、海が真に一つの文芸意識として日本文学の浄化にあつかるまでになつたのはやはり万葉の時代であるやうである。

私は、今回あえて文学意識の中心たる三の海については、重要な指摘も多いにかかわらず省略にしたがつてきたが、海のもつ浄化の作用に対する理解に逢着して賛同する。海は、あらゆるものを呑み込み、浄め、新たな生命を送り出す源だといわれてきているのだ。だが、それがすぐ「清爽」に行くのではなく、ここではそのことよりも、ハヤアキツヒメやイブキドヌシやハヤサスラヒメをかく造形表現した古人の海に対する印象について注目したい。そして、それは、たとえば海原を治めよと分担委任されながら乱暴のかぎりをつくして追放されたタケハヤササノオのイメージに重なるように思う。博士が、最初に北欧・泰西の文学にあつて、わが国に否定的な一の海の例に数えることができなものである。北欧的な、暗澹・凄絶・冥想・思索・浪漫——、の海。あたかもバイキング

さながらに、わがササノオがいるのだと思う。

おわりに

ごく最近刊行された本に、尾崎秀樹の『海の文学志』がある。滝沢馬琴から吉村昭までを取扱つた文学評論であるが、その「あとがきにかえて」という文章でも、次のように書いている（『海洋歴史小説の可能性』）。

日本は海洋国家といわれながら、意外に海洋文学が不振である。歴史文学のなかで海戦をあつかつたものもそれほど多くない。ましてや海洋歴史小説にいたつては寥々たるものである。なぜだろうか。国家権力や独占資本にバックアップされてのし歩くカッコつきの海外雄飛はあるが、独立独行のタイプがとぼしいため、そこに海のロマンスを醸成しにくいのだ。大航海時代の存在は、幕末開国期の動きとともに、私たちに多くの夢を与え、歴史小説の好材料とされてきたが、まだまだ書かれる必要がある。

実は、このたびのシンポジウムのテーマが「万葉の自然」となつたのは、担当委員の稲岡耕二先生の発案であり、たまたま歌誌『アララギ』の新年号（一九九二年）の尾形仿氏「子規派蕪村誤解」という論文の刺激によるとのことは、開始前の控室で承つた。尾形氏は、そこで、「子規は蕪村を

写生の先達と誤解することによって、近代俳句路線を確立した」という論旨で、蕪村句の背景・出典の広さ・深さなどを具体的に示している。すると、子規派の短歌観、とくに万葉理解についても誤解が多いのではないか。写生歌・自然詠というふうにとらえられてきた万葉歌についても、もう一度見直してみたらどうか。たとえば、「わたつみの豊旗雲に」（巻一―一五）の歌なども再検討されるべきだろう――、というような意向であったのである。当日、私が偶然用意していたものが、陳腐ながらそのようなものでもあったので驚いた次第である。思わず、ほかのパネラーの先生方に、それは西郷信綱氏などがずっと主張しつづけてきたことでもありますね――、などと口ばしってしまったほどであった。むろん、稲岡先生のご意図は、もっと広い分野についての問い直しにちがいない。それにしても、せっかくの機会をいただきながら、不十分きわまりないものでおわたったことを、先生ならびに会員諸氏におわびし、すべて次稿を期したいと思います。

注

- (1) とくに、森淳司氏「万葉の風土―海洋」（論集『万葉集』和歌文学会編）があり、主に巻七を取扱った好論である。
- (2) 西郷信綱氏『日本古代文学史』『詩の発生』『万葉私記』などの諸論考。

(3) 高橋六二氏。一九九二年五月十七日、山口大学における上代文学会大会での研究発表。本誌68号所載の発表要旨を、以下に引かせていただく。

女の船出を語る、あるいは歌うのはどういうことなのだろうか。『琉球国由来記』巻十三所収の「友盛ノ嶽御イベ」には、聞得大君の日本漂着譚がある。その中で巫々が缸頭・船筑・水主をつとめて、つまり「女性バカリ」で聞得大君を迎えたところのは注目される。これはいわば神女の船出だと言いうことができる。ところで久高島にはハンジャナシーという祭事があり、その中のムリーバーと言われる部分は神々の船出の姿を実修している。これにたずさわるのも神女たちだけである。こうした事例からまず神女の船出のもつ古代性を抽出してみる。

ひるがえって記紀等の語る神功皇后の新羅国度幸譚を考えてみると、これは征討といった政治的・軍事的内容をやりも、他のさまざまな要素が語り込められていることに気付く。それはなぜなのか。たぶんこの話のもと、神女の船出を語るものだったからなのだろう。また同様に、万葉集巻一―八番歌「熟田津に船乗りせむと……」も、やはり神女の船出にかかわる表現として考えなおす必要があるだろう。

- (4) 古橋信孝氏「古代歌謡―歌謡と和歌―」わたつみの豊旗雲に……をめぐって」（『解釈と鑑賞』一九七一年三月号）
- (5) 保坂達雄氏「海の行幸と留守官の歌―人麻呂の留京三首考―」（『芸能』一九九二年六月号）